

校長研修だより228

目玉焼きに何をかける？

2026・1・7 重枝 一郎

新年あけましておめでとうございます。3学期もよろしく。

新年早々、またサッカーの例えで話をする。狙っているわけではなく、なぜかそうなる。でもそうなる理由もある。それはサッカーの指導や考え方が学校教育の指導と被ることが多いからだと思う。思い出せば20代後半の時、初めて大勢の前で講演した。早良区の中高の保護者対象の講演会だった。500人くらいはいたと思う。「今の学校現場での生徒指導」という中身だったと思う。予定していた校長は都合が悪くなったと言い、その次の人も、その次の人も依頼を断ったそうで、なぜか私に回ってきた。正直ビビった。講演する際、当時のサッカー協会の指導書を参考にして資料を作ったことを思い出す。でも、結局用意した資料は使わず、自分の日常の戦闘苦闘している話を2時間した。本当は1時間の予定だったらしい。当時から、こんな感じだった（笑）。講演終了後驚いたのは、私の前に長い列ができ、多く方から「がんばってね」と応援の握手会みたいになったことである。若い私は勘違いして、サイン会のような雰囲気を出していくので、みんなに冷やかされた（笑）。また、今でこそ当たり前のように言われる「コーチング」についてもずいぶん前にサッカーの指導者講習会で学んだ。

さて、「一人一人見えている世界が違う」について、またもやサッカーの例えで話をするが・・・（笑）。

あなたがサッカーの攻撃的なポジションを担っていたとする。常に得点をとることを考えている。試合中どんどん前に出て得点を決めた。しかし、試合後のミーティングで守備のポジションの人から「お前、もう少し守備のことも考えろよ！」と責められる。自分としては正しいことをしていたと思っていたので、「守備も大切だけど、俺はオフェンスだから」と言い返す。この衝突のせいでチーム内は険悪なムードになる。

これはまさに「どちらも正しい」パターンである。お互いに違いを受け入れ、お互いの「正しい」を尊重することが大切なのは誰でもわかる。でもこういう時に一番大切なことがある。それは、「共通の目的」を確認することである。

この場合、オフェンスのあなたは「点が取りたい」、ディフェンスのチームメイトは「点を取られたくない」、その一段上の部分は「試合に勝ちたい」である。これが「共通の目的」になる。「オフェンスVSディフェンス」で対立するのではなく、「私たちのチームVS相手チーム」である。私たちの仕事でも内輪もめはあるかもしれない。まさに「どちらも正しい」パターンで。これも「私VSあなた」ではなく、「私たちVS課題」と考えなくてはならない。そうやって一段上に上がることができたら、一人では実現できないことも、もっと大きなことを成し遂げられるチームになれる。だから以前話した「私は白黒思考をしない」ということになる（校長研修だより46号）。

「一人一人見えている世界が違う」ということについてもう一つ話す。それは「違いを楽しめるか」という、「受け入れる力」のことである。私は、様々な学校で進路講演会をする際、下枠のことを話す。ここでの例えは、「目玉焼きに何をかけるか」である。

みなさん目玉焼きに何をかけて食べますか。これから私が言うものと、同じなら1、違うけどあり得るかもなら2、それはあり得ないなら3と声に出してください。

それでは、ソース（番号を指で示しながら、応える声）（私は、その様子を見ながら、ちょっとした自己開示コメント）。

次、醤油・・・ケチャップ、マヨネーズ、塩。（同様に進める）

最後です、いちごジャム（3という声と笑い）】

（伝えたいことは）たとえ自分と大きく違っていても、「そうか、おいしいか」といつたん受け入れるマインドをもってほしい。つまり“寛容さ”である。

別にいちごジャムで食べなくてもいい。でも、受け入れるマインドをもつ。これが成長の肝になる「異質のたし算」のマインドになる。それができると、いじめ問題など起きない。

何ともくだらないやり取りと思われるかもしれないが、多くの講演会でこの話をしている。おそらく、30年前から。私としては、まずは目玉焼きに何をかけるかだけでも、いろんな人がいることを実感すること、そして「相手の価値観を自分事化する」ということを言いたいのである。自分と違う価値観を頭ごなしに突き放さない、これが大切になると思う。そしてこれからの時代は「違いを楽しむ」が強みになる。つまり、「受け入れる力（柔軟性）」である。

「異質のたし算」が、すべての筋を通す。

【ポジティブに行動を起こせない人の特徴は、成功か失敗の二択で考える癖がある】

◆失敗する人の考え方



◆成功する人の考え方

